

共通テスト 100 日前 主に3年生の皆さんへ

今日で、共通テストまで100日。私学の2月入試・国公立二次試験まで5カ月です。

先輩たちが、こんな言葉を残しています。

「共通テスト100日切ったら、本番は明日だった」
「10月以降は、アツという間（ま）に過ぎていった」
「集中して取り組んでいたら、気が付いたら試験の当日だった」



先日、あるクラスで、友達に一生懸命に説明している人を見かけました。友達からの質問に対して、「それは、〇〇だから、□□になるので、つまり、〇〇が大事になる。それに対して、▽▽は……」

問題の解き方を、きちんと言葉で、友達に説明出来るレベルまで、勉強が進んでいることに感心して聞いていました。

なんとなくやったことがある、なんとなく知っているというレベルではなく、きちんとわかっているというレベル。自分でその問題を解けるレベル。紙にきちんと書いて答えることが出来るレベル。そのレベルに達してこそ、初めて点数になるのです。

この時期、しなければならないことは、**自分が今までやってきて、確実にできるという部分と、自分の理解のあいまいな部分を、ごまかさずに、きちんと認識すること。**

前者は自分の自信になります。後者が、自分が今からしなければならないことです。

今、しなければならないことは、模試の判定に一喜一憂することではありません。自分の弱点を見つめ、その弱点をどうやって克服するのかを考えることなのです。

今の自分の弱点は、「なに」なのか。
その弱点を、「なに」を使って補強するのか。
その弱点を、「いつ」までに克服するのか。

今すべきことは、試験の当日まで、自分のできるバターンの数を、できる限り増やしていくこと。

極端な説明をしますが、たとえ96パターンを完璧に仕上げたとしても、できていない4パターンが試験に出たら、点数にはなりません。その場合、96が4に負けるのです。



本当に「できる」「わかる」ためには、自分の頭を働かせる必要があります。それが、自分の机の前での勉強です。授業や補習などでインプットした内容を、きちんとアウトプットできるまで、頭を働かせなくてはならない。その自分の時間を大切にしてください。

インプットに時間を費やすことだけを考えるとダメです。多くのものに手を伸ばしすぎてつぶれてしまった「例」を、いままで、イヤというほど見てきました。

いい加減なあやふやな知識は、何の意味もありません。キチンとした知識と考え方が必要なのです。自分が取り組んだ問題を、どれだけ確実なものにしているかが、問われるのです。

*

*

必死に努力したからといって、必ず勝てる保証はありません。だからこそ、努力することの価値が高いのです。保証のないこわさのなかで、必死に努力するからこそ、その努力は尊い。「天王山の夏」と言われていますが、実はそうではありません。**本当に大事なのは、この時期を、どう粘り抜くかです。**

休み時間も、寸暇を惜しみ、『単語帳』や『一問一答問題集』を見ている人。
授業中も、真剣な顔つきで問題に向き合い、集中して取り組んでいる人。
放課後も、図書室や教室に残って、一生懸命に問題を解いている人。
放課後や昼休みに、分からない問題を、先生に質問している人。
進路指導室で『赤本』『過去問』を借り、取り組んでいる人。
放課後の補習にも、粘り強く、熱心に取り組んでいる人。

西高には、粘り強く取り組んでいる仲間がたくさんいます。しんどいのは自分だけではありません。どうか、最後まで、粘り強く走り抜けてください。

*

*

最後に、**夏目漱石が、後輩の久米正雄と芥川龍之介にあてた手紙の一部を紹介します。**

漱石は、芥川が24歳の時に発表した「鼻」を激賞します。文壇に華々しいデビューを飾った、後輩の芥川たちに、漱石が小説家としての心構えを述べた文章です。



才能に恵まれた後輩作家に対して、「小説家として大事なものは、小手先の才能ではなく、粘り強い人間観察だよ」と、自戒を込めてアドバイスしている文章です。**勉強などの取り組みに置き換えて、読むことが出来ると思います。**(一部読みやすいように、表記や仮名遣いを改めています)

「勉強をしますか。何か書きますか。君方は新時代の作家になるつもりでしょう。僕もそのつもりであなた方の将来を見ている。どうぞ偉くなってください。しかし、むやみにあせってははいけません。ただ牛のようにずうずうしく〔≡どっしりと〕進んでいくのが大事です。」(大正5年8月21日)

「牛になることはどうしても必要です。我々はとかく〔足の速い〕馬にはなりたがるが、〔どっしりと歩む〕牛には、なかなか、なりきれないです。」

「あせってははいけません。…根気づくでお出(い)でなさい〔根気強くなさい〕。世の中は根気の前に頭を下げることを知っていますが、火花〔≡その時だけのもの〕の前には、一瞬の記憶しか与えてくれません。うんうん死ぬまで押すのです。それだけです。決して相手をこしらえてそれを押しちゃいけません。相手はいくらでもあとからあとから出てきます。そうして我々を悩ませます。牛は超然として〔≡そんなものは問題にせず、堂々と〕押ししていくのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士〔≡小説家〕を押すものではありません。」(大正5年8月24日)